就職戦線異状なし

杉元伶一

就職戦線異状なし

杉元伶一

講談社

杉元伶一（すぎもと・れいいち）
昭和38年6月19日大宮市生まれ。
昭和58年早稲田大学社会科学部入学。
平成1年中退。
在学中、「東京不動産キッズ」で小説現代新人賞。現代を鋭く切りとる才筆で文壇の注目を浴びる。本作は最初の書下ろし長編小説。
著書に「フリーター・クロニック」（講談社）「ナウなヤング」（岩波書店、共著）がある。

就職戦線異状なし
定価＝一二〇〇円（本体一一六五円）
著者＝杉元伶一
一九九〇年三月十五日　第一刷発行

発行者＝野間佐和子
発行所＝株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所＝信毎書籍印刷株式会社
製本所＝株式会社大進堂
© Reiichi Sugimoto 1990 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、たしますついてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あ合わせはいいたします。

就職戦線異状なし

杉元伶一

装丁　椙村嘉一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目

次

1 恐るべき優秀な学生……8
2 内因と外因と要因……25
3 「ねえ聞いて」攻撃……37
4 提出書類の書き方……53
5 内々定降臨……67
6 我かくてスパイダーマンとなりき……79
7 去年の夏の日……102
8 就職問題討論会……128
9 白い部屋にて……152

10 転戦スケジュール……164
11 迷宮の試験会場……179
12 負傷兵士の慰問……192
13 祝辞と分析……217
14 最終面接1……249
15 天使のため息……267
16 俺たちは決して忘れない……278
17 最終面接2……292
18 エピローグ……306

NとKに——

会議室の壁には居並ぶ役員お歴々、彼らが睥睨する対面中央の椅子にはリクルート・スーツの大原が身を固くして座っている。
「大学時代に大原君が最も熱心に取り組んできたことは何かね？」
左端のデブが代表して書類に目を落としたまま、大原に質問をした。
大原は傍らに置いたアタッシェケースを取って揃えた膝の上で開き、無言のまま、てきぱきとＭＰ５Ａ３サブマシンガンを組み立てる。マガジンを叩き込み、セレクターをフルオートに撥ね上げると、大原は立ち上がって言った。
「殺し屋です」
グレーの絨毯に空薬莢をばら蒔きながら、右から左へ銃口を腰高水平に滑らせていき、一人外して役員を薙ぎ倒した。
机の下に逃げ込んで震える社長は、散らばった書類を掻き集めて叫んだ。
「内定！」

1　恐るべき優秀な学生

早稲田大学49号館地下、本格文芸倶楽部の部室には、夏休みにもかかわらず、大勢の部員が一攫千金を狙って集合していた。

文学部三年、飯塚が掲示板に出走表を張り出し、千円札を握りしめて注目する一同に深々と頭を下げ、挨拶をした。

「本日は八月一日、求人票が公開され、いよいよ就職シーズンの到来となりました。即ち、本格文芸倶楽部、晩夏の風物詩、内定獲得レースの開幕であります。昨年はろくな馬がおらず、中止の憂目に逢いましたが、本年度は来春卒業予定、四頭もの出走馬に恵まれ、波乱含みの展開が期待されます。対象となるレースは大手マスコミ、放送、出版、新聞の三業種であります。何か質問はありますか」

一人の部員が手を上げて、

「大手マスコミかどうかは誰が決めるんだ?」

「何をもって大手とするかは判断の難しいところですが、便宜上、申告所得十億、初任給二十万以上を基準にし、知名度、イメージを考慮して、就職内定獲得レース運営委員会が決定しま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

す」

もう一人が手を上げ、

「配当はどうなってんだ」

「総売上げを勝ち馬で割って、馬券購入者の分配となります」

更に一人が手を上げ、

「四人とも内定取れなかった時は？」

「縁起でもない。しかし、充分予想される事態です。その場合は払戻しします。他には？　ありませんね？　馬券は単勝のみ、一枚百円で、発売は今日から八月二十日まで、会社説明会解禁をもって締め切らせて頂きます。枠順、データは表の通り。それでは、皆さん、他人の人生で大金を摑みましょう！」

枠番	馬名	厩舎	性齢	成績	脚
1	シトロエン南野	文学	牡4	全優	先
2	ポバティ立川	文学	牡4	優少	短
3	ジーニアス糸町	政経	牡5	不明	差
4	スカーレット大原	社学	牡5	笑	癖

部員は掲示板へ押し寄せ、1枠二十枚、3枠十枚、大穴狙いで4枠一枚、などと口々に叫び

ながら、千円札を飯塚に叩きつけた。

ラジオ局のスタジオを大原がよろめいて後にしたのは午前二時を回っていた。

虎ノ門の交差点でようやくタクシーを拾い、後部シートにぐずぐずと崩れ落ちてから、さて、今夜は誰の家に襲撃をかけたものか。

菊千代はモデルの彼女の仕事にくっついて地中海へ優雅なサマー・ヴァケイションで不在。帰国予定は九月末。

南野(みなみの)は深夜突然の訪問に対して理解を示す寛容さを持ち合わせていない。

武井先生は十中八九女をお連れ込みになってよろしくやっていらっしゃることだろう。彼は友情に厚い変態だから、歓迎はしてくれるだろうが、OOOOHHH——と嬌声から体位を推察しながらキッチンの床でまんじりともせず夜を明かすのは辛い。

田中の所なら朝まで無修正ヴィデオ大会、糸町の所ならベースとギターを持ち出してきて、近隣住民総立ちの3コード・セッションが始まる、疎遠な後輩の誰かれに気を遣わせるのは忍びない。ともかく三十六時間起きっぱなしの今夜はゆっくり眠りたいだけだ。

「お客さん、どこまで?」と運転手。

「あー、仕方ないから下落合二丁目まで」

立川(たちかわ)修の貧民宿なら余計な気遣いは無用だ。あいつは俺に友好的でないが、金を貸している強みがある。借金を清算しないうちは俺の下僕だ。叩き起こしても文句は言わせない。

留守かもしれないし、ドアを開けないという抵抗に会うかもしれないが、あんなボロ下宿のドアなんか蹴飛ばせば開くだろう。

案の定、ドアは蹴飛ばせば、開いた。
「ひー、なんだなんだ、なんだ。ノックもしないで、いきなり押し入ってきて……」
六帖一間の下宿で小津安二郎『大学は出たけれど』のヴィデオを見ながら、ミルク・パンから茹でたそーめんを啜っていた立川修は大原の唐突な出現に肝を潰した。
「あれ、ノックしなかったか。いやー、立川君、起きていたかね」
大原はずかずかと上がり、冷蔵庫から缶ビールを抜いて飲み干し、鞄から携帯用歯ブラシを取り出すと、そーめんを喉につまらせ、むせ返る立川の前で、ガシガシ磨き、簞笥からまっさらのシーツを探してベッドに広げ、倒れ込んだ。
「立川君、おやすみなさい」
立川はミルク・パンをテーブルに叩きつけ、シーツの端を摑んで力まかせに引っ張り、大原をベッドから転げ落とした。
「ふざけるのもたいがいにしろ。こんな真夜中に何しに来たんだ」
「寝にきてやったんだよ」
寝にきてやっただー、立川は呻き声を上げて事態を反芻し、本や雑誌、新聞の束を積み上げて足の踏み場もない部屋の中を巧みに歩き回りながら、驚きと怒りに整理をつけた。
「来るなら来るで電話くらいしたら？」
「料金不払いでいつも不通じゃねえか」
「この時期に不通にしている訳がない。大体なんで僕の所に寝に来なけりゃならないんだ」
「仕様がねえだろ。番組の収録が延びに延びて、終わったのが二時過ぎだったんだよ」
「自分の家に帰ればいいじゃないか」

「俺んち、大宮だぜ。タクシーで羽根倉橋を越えたら、メーターが四桁になって、バック・シートで俺はたじろいでしまう」
「そんなこと知ったことか。誰か他の奴の家に行けよな」
大原は低い声で言った。
「よくもまあ平然とそういう口がきけるな。お前、自分を何様だと思ってんだ」
「さあ、何様なんでしょう?」

「立川さんの馬名はどうしようか」と内定獲得レース運営委員長の飯塚は、出走表を作成する会議の席上、言った。
「あの人の最大の特徴といえば?」と委員の一人が尋ねた。
「物欲とスケベは人一倍のくせに、経済力が伴わないことだろうな。端的に表現すれば、貧乏だ」と一人が答える。
「ボバティ立川にしよう」と飯塚は決定した。

「貧乏人だ!」と大原は指弾した。「帰ってほしけりゃ帰ってやるよ。だがな、その前に貸してた金を返してもらおうか」大原は指差していた右手を開き、生命線が異様に長い手の平を突き出した。「おらおら、おら。債権を回収できれば、料金メーターの四桁五桁にたじろがなくてすむんだ」
五桁は大袈裟にせよ、借金があることは事実だ。いくらになるだろう。あっちこっちでたかっているから総額さえ不明だが、大原が大口債権者の一人であることは否めない。

「いやあ、大原さん、本日はようこそおいで下さいました。むさくるしいスラムですが、おくつろぎ下さい」
　大原は攻勢に転じるとあくまで強い。肩を叩け、腰を揉め、シャトー・ブリオン1971年を抜け、バンドを呼んで演奏させろ、綺麗どころをずらっと並べてロケット・ダンス、山手通りをパレードだ、と無理難題の嵐。
「気に入らねえな」と大原は尚もむずがった。
　立川は大原の肩を叩きながら、
「この期に及んで、まだご満足いただけないんで？　つくづく手間のかかる客だな」
「気に入らないのはお前の人間性だ」
　大原は涼風そよぐ壁の一角を指差した。
「ここに乱入した時から気になってたんだが、あれは何だ？」
「インバーター・エアコン、マイコン制御でいつも快適でございます」
「ヴィデオ・デッキも気に入らない」
「S－VHSですぜ、旦那」
「借りた金を返さないで、こういう分不相応な物をいけしゃーしゃーとよく買えたな。うちのデッキは痛恨のβだってーのに、許せねえ、没収してやろうか」
「全部ローンだよ。生活の必需品だから、月々三千円で死にもの狂いで買ったんだい」
「エアコンとヴィデオ・デッキのどこが必需品なんだ、貧乏人。このままじゃ餓死するよーなんて泣きつくから、ヒューマニティにほだされて、小麦粉でも舐めろ、と金を貸してやったんじゃねえか。それが、裏に回ればこれだ。慈善を喰いものにして、ユニセフの苦労がよく解

る。債権者に内緒で生活水準上げていいと思ってんのか」
「今は大切な時期じゃないか。エアコンは蒸し暑い夜の安眠に欠かせない。体調は万全にしておかないといけない。ヴィデオ・デッキはテレビ番組をチェックするために必要なものだし、人生の興廃この一戦にありって時に借金なんか気にしてらんないよ」
「お、開き直ったな。何が人生の興廃だ」
「就職活動です」
「しゅーしょくかつどー?」
「大原さんも来春卒業だよね。活動の進行状況はどうですか?」

「大原さんの馬名はスカーレットでいいね」と内定獲得レース運営委員長の飯塚は、出走表を作成する会議の席上、言った。
「日系三世かフィリピーナの踊り子みたいな呼び名だけど」と委員の一人が笑った。
「スカーレット・オハラが出典なんだろ。しかし、大原さんが就職するのは信じられないものがあるな。活動してるの?」と委員の一人が尋ねた。
「一応エントリーだけしておこう。頭数は多い方がいい。大穴になるかもしれない。でも、多分、あの人は先行きを何も考えてないんじゃないかな」と飯塚は腕と口を結んだ。

「全然考えてない」と大原は認めた。
「どうするの、卒業したら?」と立川が訊く。
「どうするのかな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.